

博士論文審査要旨

論文審査担当者

主査	明星大学教授	島田博祐
副査	明星大学教授	廣瀬由美子
副査	明星大学准教授	竹内康二
副査	湘南医療大学教授	鶴見隆正

申請者氏名 河辺 信秀

論文題目 理学療法士養成校におけるカリキュラム改革—学習への動機づけの影響と診療参加型臨床実習導入の効果について—

(論文審査の結果の内容)

本研究は、理学療法士養成校における学習内容の高度化とそれに反する学生の学力・学習意欲の低下という実情に鑑み、学習効果を高める教育方略を探るための基礎研究として、理学療法士養成校学生を対象に、学習への動機づけが知識の獲得や学習行動に及ぼす影響について検討することを第一の目的とした(目的1)。

また、従来形式の臨床実習における過度の課題レポートなどによる学生の心理状態の悪化や実習中止の問題、学生が患者の治療をまるごと担当する患者担当制に伴うコンプライアンスの問題などを改善するために、近年注目されている診療参加型臨床実習である「クリニカル・クラークシップ (CCS) を理学療法士養成課程に適用し、その効果を検証することと教育方略の提案を第二の目的とした(目的2)。

上記の大きな2つの目的に基づいた論文構成として、目的1に関する実験的調査に該当する部分が第1～3章の各研究、CCS導入に係る臨床実習における効果の検証に該当する部分が第4～6章となり、第7章の総合考察で、それまでの章で得られた知見を活かしたカリキュラムの提案につなげている。

目的1に係る諸研究として、「学習への動機づけの試験成績及び自己教育力に及ぼす影響」、「セルフエフィカシー (SE)、学習行動、能力帰属フィードバックの試験成績への影響」に関し重回帰分析を行い、試験成績やSEとフロー理論に基づく情動面の動機づけが関連していることなどを見出した。

目的 2 に関しても、不安尺度としての STAI、POM などを用いた「心理状態及実習継続率に対する効果検証」、アンケートやインタビューによる「CCS 導入 2 年間の教育方略の定着度に関する調査」、「CCS 臨床実習経験者から見た臨床実習教育方略の検証」など、量的、質的両面からの分析を行い、(1) CCS の導入が実習中の学生における状態不安を低減させ、実習継続率に効果をもたらすこと、(2) 導入 2 年間で見学・模倣・実施の原則が定着し、ハラスメントの減少につながったこと、(3) CCS の課題として、症例の背景や障害像、経時的変化を捉えるための臨床的思考能力の構築が必要なことなどを明らかにした。

また最後に上記(3)に関し「CCS における臨床的思考能力獲得を目指した RIME Method の導入」を企図した研究を試験的に行い、客観的臨床能力試験 (OSCE) での検証を試みている。

本論文の講評として、修士論文から一貫して取り組んできたテーマを、基礎・応用 (実践) の両面からさらに構造的に検証し、方法論に関しても統計解析を用いた量的分析、構造化面接を用いた質的分析を適宜使い分けることで、信頼性、妥当性の高いエビデンスベースに基づいた内容となっており、高い評価が与えられる。先行研究に関しても、動機づけ領域、CCS 関連ともよく整理されている。

また、研究の独自性という観点からも、理学療法領域では用いられていなかった、CCS による導入効果と教育方略としての可能性を、実習中の負担軽減やハラスメントの減少による学生の不安解消、知識・技能の定着など、具体的な事実として、明確に実証した点が評価できる。

時間の関係で CCS の課題 (臨床的思考能力の獲得) を補い、スタッフトレーニングの基軸となる可能性を持つ RIME Method の効果検証の部分が、データ収集が十分に行えなかったことなどから、若干不明確になった面はあったが、今後、CCS と RIME を組み合わせたカリキュラム案を作成することで、さらに教育効果を有効ならしめる点が示唆されており、本研究で得られた知見は、今後広く理学療法士養成校で汎用し得る可能性を有しているといえる。そうした実践的な面からも、今後に資する優れた研究である。

よって、本研究は博士 (教育学) の学位を授与するに十分価値あるものと認める。

(試験および試問の結果の要旨)

論文申請者は、口頭試問、それに続く公聴会においても審査者、質問者からの質問に真摯かつ明確に回答することができた。

理学療法学会の重鎮である外部審査委員の鶴見教授からも、今後に資する価値の高い研究であるという意見を得ることができた。

これらの事項を踏まえ、論文審査委員 4 名で慎重に審査した結果、合格と判定した。